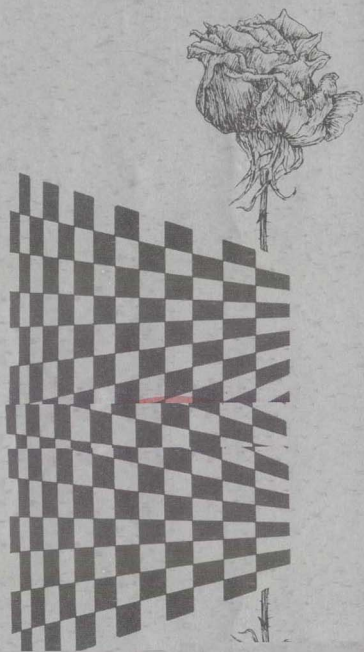


をめぐる断章

316のアフォーリズム

吉行淳之介



文化出版局

男と女をめぐる断章

316 のアフオリズム

定価 七八〇円

昭和五十三年九月十五日 第一刷発行
昭和五十三年十月二十五日 第三刷発行

著者 吉行淳之介

発行者 大沼 淳

発行所 文化出版局

東京都渋谷区代々木三の二の一

郵便番号 一五一

電話 (〇三)三七〇一三一一(代表)

振替 東京二一九五六七〇番

印刷所 カバー・表紙・扉 文化カラー印刷

本文 堀内印刷

製本所 明泉堂

0095-710460-7368

© Junnosuke Yoshiyuki 1978

目次

第一章 恋愛と結婚をめぐって

恋のはじまり	9
初恋について	14
恋の小道具	16
恋愛の心理学	18
結婚の生態学	22
生臭さと苦さ	26

第二章 女というもの

女の心理とセンス 37

女の本姓 46

女の中から・女のかたち 51

女のおしゃれについて 57

美人であることについて 60

さまざまなタイプの女 64

娼婦、そして娼婦的な女 69

《間奏曲Ⅱ》対談の席で口にしたちよつと氣の利いたセリフ・その(1) 74

第三章 男というもの

男の宿命 81

ぎごちない時期 84

ダンディズムについて 91

やさしさと思いやり 96

征服欲について 99

男の本音 102

《間奏曲Ⅲ》 対談の席で口にしたちょっと気の利いたセリフ・その(2) 105

第四章 男と女のいる風景

男と女の関係 113

男と女の違いと落差 120

性の架け橋 127

性の調味料 132

快楽について 137

同性愛その他 140

《間奏曲Ⅳ》 私流「悪魔の辞典」 144

第五章 生きてゆく上で

人生の味 151

ある人間観察 157

精神・肉体・感受性 164

人間関係とエゴイズム 167

金銭について 172

食卓の光景 175

都会の風景 179

生と死について 184

あとがき 189

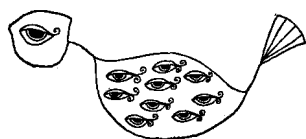
《吉行淳之介著作一覽》 192

装画・装幀 村上芳正
カット 島尾伸三

男と女をめぐる断章――

316 のアフオリズム

第一章 恋愛と結婚をめぐって



恋のはじまり

1 熱情がお互の心と軀にあふれた状態において、そのことを確かめ合える肉體關係が、恋愛の理想的な境地だと私は思う。古風な言葉でいえば「靈肉一致の境地」といったものである。

——私の恋愛論——

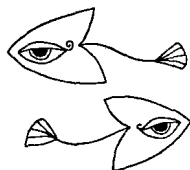
+

2 気に入るということは、愛することとは別のことである。気に入るということは、はるかに微温的なことだ。愛することは、この世の中に自分の分身を一つ持つことだ。それは、自分自身にたいしてのさまざまな願望が、倍になることもある。

——原色の街——

+

3 「恋」というものは、不安定な状態に置かれていると燃え、安定した状



態がつづくと崩壊する構造をもっている。

恋し合ったはじめは、相手の着物の下に何が隠されているか、さらには、その皮膚の下に何が隠されているか、頭の中にどんな考えが、軀の中にどんな過去が……、とすこぶる不安定な状態といえる。

そういう未知のヴェールが、一枚ずつずり落ちてゆき、やがて、ラッキョウの皮の最後の一枚を剥がすとパツとなにもなくなるように、恋もその瞬間に消えてしまう。

——浮気のすすめ——

†

4 惚れた状況というのは、わりに簡単にわかる。つまり、自分としたことが……、という状況になることが、惚れたということだ。——恋の十二カ月——

†

5 「一目惚れ」ということは「浮気な性質」ということとは無関係である。人は意識しているにせよ無意識にせよ、自分の理想とする異性を探し求めている。ある学者はこの状態を「恋愛予備状態」と名付けているが、つまり恋愛のための火薬樽を持ち歩いている状態で、「一目惚れ」というのは、一つ

の火花によってその火薬樽が点火されたことである。すなわち、刹那の間に起ったその恋にも長い準備期間が在ったというわけだ。

——私の恋愛論——

†

6 恋愛感情を持った同士の精神と精神との間に濃厚な分泌物が生れ、それがなまじの肉体関係よりはるかに強烈なものになる場合がある。

——ぼくふう人生ノート——

†

7 恋慕の情というものが、初心な人間に忍びこむと、無分別になる一方、相手に対する関心をヌケヌケと表明する技巧も知らず、その純情さがかえって抑えつけられた情欲の醜さを滲み出させるようになることが多い。

——薔薇販売人——

†

8 恋心というものは、相手の「意地悪な感じ」を「いじらしい」感じに変え、「生ぐさい感じ」を官能的なものに変える。

——女のかたち——



。 9 女性の愛というものは、相手に自分をささげることによって完成され、男性の愛は相手から奪うことによって完成される、と私はおもっている。

——ほくふう人生ノート——

10 どんな男性でも、恋してしまうと不器用になってしまう。

——私の恋愛論——

11 恋愛というものは、対象にたいしての情熱が起らなければ、生れることのできないものである。そういう情熱をどうしても見出し得ないという人たちが、とくに現代においては多くなっているのではないか。

——ほくふう人生ノート——

12 けっして失恋しない類の人がいる。その一つの種類は、けっして恋をしない人である。

——私の恋愛論——

初恋について

13 初恋というものは、自分が長いあいだ心にあたため思い描いてきた理想の人が現実に見れた、とおもったときに、とかく起るものだ。

——ほくふう人生ノート——

†

14 初恋というものは特定の相手に恋している、というよりもむしろ「恋」というものに憧れて、自分で描き出した恋の幻影に恋している状態とも言える。

——ほくふう人生ノート——

†

15 男性の側から言って、初恋というものには、肉体の未成熟についての引け目がいつも意識の底にひそんでいる。たとえば、十六歳の女性はすでに少